

# 扉の向こうへ

## 第6部 長期・高齢化募る不安 ①

ひきこもりを考える連載企画「扉の向こうへ」取材班は、ひきこもる本人や親をはじめ、医療従事者、先進的な活動に取り組む行政や民間の関係者取材してきた。その中で、多くの人々が深刻な問題として、ひきこもり期間の「長期化」と当事者たちの「高齢化」を挙げた。ひきこもっている時間が長くなれば、当事者は年を取り、社会とつながる機会が得にくくなる。「親が老いていなくなったら、本人はどうなるのか」。重くのしかかる不安。山梨でも同じ問題が起きているのか。取材班は再び、県内の現場に分け入った。

### △扉の向こうへ」取材班

◇ シゲル(79) 〓 郡内地域 〓 の家の2階に、長男ヒテキ(49)の部屋がある。夫婦と息子の3人暮らし。収入は妻と合わせて月十数万円の年金。自分も妻も、老いた。「親が生きているうちはいい。だけど、この先は…」

山梨発 ひきこもりを考える 38

きこもるようになって20年が過ぎた。たまに降りてくる息子の、しわが寄った顔と白いものが交じった髪を見るたび、通り過ぎていった時間の長さを感じる。

居間から階段を上がってすぐのところに、息子の部屋はある。わずか二十数歩の距離が、遠く感じる。ヒテキがひ

アパレル企業に勤めていた

があれば夜でも同僚から相談の電話があった。

一部機能を東北地方の工場に移転する計画が持ち上がった。機械を移転先の工場に組み立てて、現地の作業員に使用方を指導する。ヒテキは十

「宿泊先の布団から出られなくなった」。ある日、ヒテキの上司からかかってきた電話に耳を疑った。1991年の春、息子は憔悴した表情で自宅に戻ってきた。「何があったんだ」と尋ねても、「どうせ言っても分からない」と答えよちとはしなかった。

自分育てた子なのに、どう接していいのか、何と声をかければいいのか分からな

# 老いる親見えない前途

ヒテキがひきこもってから、シゲルは階段を上った先にある息子の部屋が遠く感じられるようになった。 〓 郡内地域

上も仕事詰め。長い出張だったが、それなりに楽しんでいく様子だった。移転計画は順調で、計画に携わる従業員は一人、また一人と少なくなり、息子だけが指導役として現地に残った。

「一緒に仕事をそろそろだ」「一緒に仕事をそろそろか」。何度ドアの前で口に出そうとしたことか。そのたびに「逆効果になる」「この思いが頭をよきり、言葉をのみ込んだ」。

（文中仮名）

## 息子の回復待ち続け20年



ヒテキがひきこもってから、シゲルは階段を上った先にある息子の部屋が遠く感じられるようになった。 〓 郡内地域

貝のように口を閉ざし、部屋から出てこない。妻が料理

る日々。半年、1年、2年…。淡い期待は、いつしか消えた。この家にいるのに、姿が見えない。そんな「非日常」が、次第に「日常」と化していった。

（文中仮名）

この連載へのご意見や感想をお寄せください。記事で紹介させていただくことがあります。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班（ファクス055・231・3161、電子メールkikaku@sannichi.co.jp）。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 39

## 第6部 長期・高年齢化募る不安 ②

今年の正月、シゲル(79)

郡内地域の元に、かつて勤めたアパレル企業の後輩社員から年賀状が届いた。懐かしく思いながら裏返すと、会社の近況がつけられている。シゲルが指導した新入社員が、今や「長」と名の付く立場にいた。時の流れが実感を伴って迫ってくる。ひきこもっている長男のヒデキ(49)のことが頭に浮かび、何とも言えない気持ちになった。

暴力を振るったり、暴言を吐いたりするなら、体と言葉で対抗できる。だが、そんなことは一度もなかった。ひきこもる息子と、どう向き合えばいいのか。食

## 履歴書に残る空白期間

# 再起の願い閉ざされて

手腕を買われ、製造に当たった。新卒社員ばかりの13人を若手の育成役も任せられていた。息子がひきこもっても預かった年。縫製は苦手でも、わが子のことばかりもアイロンは得意、という考えのわけにはいかなかった。子もいる。なるべく本人の

良いところに目を配りながら、褒めたり叱ったりを繰り返した。年が離れていても、正面からぶつかれば理解し合えた。成長を目的の当

助言が浮かぶ。もどかしさを感じながらも、息子の変化を待ち続けるしかなかった。

ひきこもりから8年がたったある日、突然ヒデキが切り出した。「俺、働くよ」。近くの店から履歴書を買ってきて、ハローワークへ通うようになった。

自宅に届くのは不採用の通知ばかり。購入した軽自動車は庭に置いたまま、「使わないかな」と尋ねると、息子は「うん」とだけ答え、自分の部屋に戻っていった。

事の時だけ、ずっと居間に下りてくる。顔を見せるようにはなったが、会話はほとんどない。一時期を除いて、こんな生活が20年以上続いている。

年賀状が届いたアパレル企業で、シゲルはフアッションという競争の激しい世界に生きてきた。常に時代の先端を意識し、新しい商品を作り続けなければ飽きられる。経営者側から



息子のひきこもりが長くなるにつれて、シゲルの手には深いしわが刻まれていった 郡内地域

たりにすることが喜びだった。職場で若手と気兼ねなく話ができるのに、自宅では息子との間に言いようのない距離を感じる。ヒデキが居間に下りてくるときを見計らって、何度も話し掛けてみた。「ああ」「うん」。返ってくるのは相づちのような、そでないような声だけ。同じ年頃なのに、その気持が強まるたび、医師の「頑張れ、とは言わないでください」の

「外に出たい、働きたい」というヒデキの願いは、「あなたには必要ない」という企業の回答によって閉ざされた。ひきこもりの終わりは、再び見えなくなった。

親の会例会 22面

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 40

## 第6部 長期・高年齢化募る不安 ③

ひきこもりになる理由やきっかけは、さまざま。意欲がわいて社会復帰したいと就職活動しても、ひきこもっていた期間の「履歴書の空白」を面接で指摘され、不採用とされる例も少なくない。

「あなたは不要」の宣告と受け止め、傷付き、再びひきこもりの生活に戻っていく。「どうしようもできない」。本人や家族を、強い無力感が襲う。親の収入に頼る生活、ひきこもりの状態が「安定」し、高齢化していく。シゲル(79)は都内地域Ⅱの一家も、そんな負のスパイラルに陥っていた。

## 「親の会」で気持ちに変化

「これがいいと思っつ」。シゲルはある日、居間を通りかかった長男のヒデキ(49)に話し掛けた。手元に

# 出口なのか、小さな光

は自宅の火災保険の更新用書類があった。ヒデキがひきこもりになってから20年

以上。「俺に何かあったら、ソを指さし、2階の自室に戻っていった。シゲルは、よな」。シゲルは息子の顔を見ながら、負担を感じさせないよう明るい口調で語りかける。

「これでいいんじゃない」。息子は一番安いプラ

婦の年金で生活を維持してきたが、それもいつまで続けられるか。

息子も今年50歳。昨年は健康診断で心臓に疾患が見つかった。普通の生活を送っているにも、40半ばを過ぎれば体のあちこちが不調を訴える。まして、ひきこもり生活に運動不足の身。将来への不安が膨れ上がっていく。

「俺がこんなだから、お前が動いてくれないと、うちが沈没してしまう」。肺炎にかかった後、ヒデキに懇願した。「親が亡くなっ

た後のことを、一緒に考えたい」。息子は一番に話を聞いてくれた。そして一呼吸置く。その繰

り返し。隣では妻がハンカチで目元をぬぐう。気がくと、同じひきこもりの子と生活する親たちが、うなずきながら聞き入ってくれているのに気付いた。

もう少しここにいたい。久しぶりに前向きな気持ちになれた。ひきこもりの本人や経験者だけが集う場に参加した息子も、「苦しいのは自分だけじゃない」と感じる事ができたのだらう。心なしか、ほっとした表情だった。

暗く濃い霧の先に小さな光が差した気がする。出口はすぐそこかもしれないと思えたが、まだずっと先かもしれないと考え直す。焦ってはいけなさと自分に言い聞かせる。

「気長にやっついでいいから。車に乗り込み、運転席に向かつて声を掛けた。「出発するよ」。ヒデキがそう言っつてアクセルを踏み込む。親子3人を乗せた車は、ゆっくりと走りだした。

(文中仮名)



親の会で気持ちを吐き出すシゲル。同じ境遇の親たちが耳を傾けて聞き入った。＝甲府・県福祉プラザ(撮影・広瀬徹)

# 扉の向こうへ

第6部 長期・高年齢化募る不安 ④

絵を描くのが好きだった。夕食をつくる母親のそばで、新聞折り込みのチラシの裏に鉛筆を走らせた。

自分の思うままを表現できることに、時間のたつのも忘れて夢中になった。

サトコ(34) 国中地域 Ⅱ 自分が取り込んでいるのは、ひきこもりになって20年近くたつ。なぜこんなに長い間ひきこもってしまったのか、自分でも理由は分からない。昔を思い出そうとする、絵を描いている

幼いころの自分が輝かぶ。あんなに好きだったのに、いまでは鉛筆や紙

を見るだけで気分が悪くなる。中学生のときに不登校になった。同じころ、父親の借金を家まで督促に来た大人に強い嫌悪感を抱き、他人と関わりたくないと思うようになった。姉や妹は職場や学校に通えたのに、自分だけ自宅が「居場所」。

家の外に出られなくなっていた。

夕方になって、部屋の片隅に洗濯物がたたんであるのに気付く。家にいたのは

「存在」消して20年

山梨発 ひきこもりを考える 41



サトコが中学生のころに描いたツバキの絵。いまは鉛筆を手を取ることはほとんどない  
—国中地域 (撮影・広瀬徹)

## 何のため生まれたのか

サトコだけ。自分が取り込んで片付けたのに連日、記憶がはつきりしない。テレビの前に座っているも、番組の内容は全く覚え

時間がただ流れていく。家という区切られた空間に「いる」だけ。せめて家族

い切ってアルバイトの面接を受けた。1日に2時間で「いる」だけ。これをきっかけに

振り返れば、中学時代に「何のために生まれてきたのか」。この世から消えてしまいたいという気持ちは、いまでもある。(文中仮名)

の邪魔にならないようにと、存在を消そうとした。笑わない、しゃべらない。半年近く声を出さないこともあった。喜怒哀楽を感じなくなり、自分が空っぽになったみたい。「このままいなくなたら」と何度思ったことだろう。

20歳を過ぎたころ、持病の関節炎が悪化した母親が仕事を辞めなければならなくなりました。父親は不在がち。自分が働くしかないと思

外に出たかった。だが、前に出たら頭が真っ白になり、いつもなら当たり前に読める字も読めない。「何をやってるんだ」。再びひきこもった。母親は高血圧や内臓の病気を併発し、ほとんど歩けなくなった。サトコは代わりに買い物に出掛け、人がいないタイミングを見計らってレジに並ぶ。支払いを戻ると逃げるように家に戻った。生活費は月4万5千円の母親の年金だけ。働こうと思っても、アルバイトの面接で「フリーズ」してしまっただけの嫌な記憶がよみがえる。

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 42

## 第6部 長期・高年齢化募る不安 ⑤

33歳の秋、サトコ(34)は国中地域に生まれて初めて一人で電車に乗った。ひきこもりになって20年。重い関節炎で隣の病院に入院している母親(72)を見舞うため、意を決して家を出た。切符を買って車面に乗り込んだままでは良かったが、知らない人たちが同じ空間にいるのが怖くて仕方がない。自宅に在るときと同じ、存在を消すように、うつむいた。隣駅までの1区間、わずかに数分が1時間にも感じられた。

## 母が入院、貧困に直面

生活費は母親の年金4万5千円のみ。誰かに助けを求めたくても、世間体が悪いと思っのか、母親が強く拒んだ。

ひきこもりから脱したいと、サトコは役所に電話し



自転車を引いて歩くサトコ。ひきこもりから脱して、「前に進みたい」と願う  
＝国中地域 (撮影・広瀬徹)

# 孤立いや初めてSOS

たことがある。たらい回しにされたあげく、受話器の向こうから聞こえてきたのは「分かりませぬ」の返答。事務的な口調に傷ついた。訪ねてきた親戚からも「二日中、テレビ見てころ

「しろしてただけでしょ。」と冷たく言われ、「ひきこもりのことを相談されても困るよね」と自分に言い聞かせるしかなかった。ある日、新聞で支援団体の記事を見つけた。「どう

た。その後、見えない将来に言いようのない不安を感じる。同じ番号に電話をかけるようになった。母親が体調を崩してから、その日の生活にも窮した。やりくりを続けたが、厳しさは増す一方だった。入院費が用意できず、母親は自宅のアパートで療養していた。「私が働くしかない」。何度もそう思ったが、他人の中に身を置くことを想像するだけで震えが来る。「ためな人間」と自分を責めた。

家賃を滞納しがちになり、管理人から退去をほめかされたのがきっかけだった。食費を切り詰めたが、関節の痛みをこらえる母親の姿を見て限界だと悟った。「助けてください」。話を聞いてくれる支援団体に

SOSを出し、生活保護を申請した。生活は持ち直したものの、根本的な解決ではない。病床の母親と暮らしていくには、自分が社会に出て収入を得なければならぬ。ただ、20年もの間、ひきこもっている自分には何も無い。電車に乗るのだから一苦勞だ。

母親にもしものことがあったら。通院できるようになり、少し元気を取り戻したように見えるが、いつももう伏せるか分からない。もう若くはない。「そうなら、ひとりぼっち」。

(文中仮名)

# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 43

## 第6部 長期・高年齢化募る不安 ⑥

民生委員のヨウコは2月の夕方、近所の住宅の2階を見つめていた。いつもなら部屋に明かりがついているはずの時間。「息子さん、どうしたのかな」

その家には高齢の女性と、50歳になろうという男性の親子が住んでいる。ただ、男性は姿をめつたに現さない。長い間、ひきこもり状態だ。

民生委員は地域住民の相談に応じるとともに、必要に応じて役所など行政側との橋渡しも行い、児童虐待など変化の発見役にもなり得る。山梨県福祉保健総務課によると、県内27市町村に2518人（3月1日現在）。地域に長く住み、事情をよく知る住民が選ばれ

## 民生委員の苦悩

# そこにいるのに届かない

ることが多い。ひきこもりの実態調査をした自治体がなく、詳しい状況が分かっていない山梨で、民生委員が地域の「ひきこもり事情」を把握しているケースは少なくない。



ヨウコが着けている民生委員のバッジ。ひきこもり支援のため、「委員でいるうちに関わりを持った方がいい」と考えている  
＝映中地域

ヨウコの記憶に残っている男性は、小中学生のころまでだ。近所に住む顔見知りの女性の子で、外で遊ぶ姿をよく見掛けたが、ある時期からはたりと見なくなつた。勤めと育児で忙しくなつたヨウコが、再びその存在を強く意識するようになったのは、民生委員を引

付いた。「息子さん、いくつになるんだろう」ヨウコ自身、孫ができる年齢になつていた。同じように重ねた年を数えると、「男の子」は50に届くはず。近隣住民から問はず語りに話を聞き、10代のころからひきこもっていることが分

になっていた。「息子がいなくなったから、草刈りくらいでつづやいた。「何をやらせたらいい」。1人の高齢男性が発した怒鳴り声に、集まった住民はどう応じたいか分からない様子で押し黙った。

ひきこもりに悩み苦しんでいる家庭が、そこにある。でも、どう支援の手を差し伸べればいいのか分からない。ヨウコはいま「扉」の外側で思い悩んでいる。

き受けた7年前のこと。夕刻に、女性の自宅の2階に電気がともっているのに気

ある日、地域で住民の清掃活動があり、女性の自宅周りだけ雑草が伸びたまま

女性と買い物先で顔を合わせた。世間話の後、ヨウコはさりげなく話題を女性の生委員だからこそ、多様な相談に応じることができると女性は柔和だった態度。ただ女性は、地域密着

長くその地に住み、地域や住人のことをよく知る民

（文中仮名）



# 扉の向こうへ

山梨発 ひきこもりを考える 45

## 第6部 長期・高齢化募る不安 ⑧

その男性は、真つ暗な部屋の中で帽子とサングラスを着用していた。県富士・東部保健福祉事務所副主幹の石川一仁さん(50)が理由を聞くと、「人が怖いから」。そう答えた男性は50に届く年齢で、十数年をこの4畳半の部屋で過ごしたという。

男性と出会ったのは、国中地域の保健所に勤めていた7年ほど前。父親を亡くし、母親と二人で戸建ての公営住宅に暮らしていた。生活が行き詰まり、母親が行政に相談して存在が明らかになった。「恥ずかしくて知られたくなかった」。母親がそう話した男性は、当初面会を拒絶。会えた時には心身ともに衰弱していた。「もっと早くつながることができたら」。そう考えずにはいら

## 鍵が支援、察知の早期の周囲

れない。

支援者が大きな課題と考えている、ひきこもりの長期化と当事者の高齢化。長引くほどに、就労はもち

ろん社会とも接点を持つのが困難になり、経済的な困窮に陥りがちだ。新潟県で「ひきこもり外来」を開設、全国KHJ引きこもり親の会の副代表を務める医師の中垣内正和さん(65)は、「長期化が当事者の生活の質に及ぼす影響は大きい」と話す。

以前、外来を訪れた当事者のひきこもり期間を調べたところ、8・7%が15年以上に及んでいた。100万人とも推計される全国の当事者数を踏まえると、約9万人が長期化している計算になる。

中垣内さんは、ひきこもりの当事者の存在を早期に察知し、支援に結び付けることが、長期化と高齢化を防ぐ鍵と言っている。実現には、

な処方せんも示されてはいない。ただ、「つながることが最初の一步」(中垣内さん)。職場や学校で傷付き、自分を守るために社会から撤退せざるを得なくなった人たちは、外に出たい、復帰したいと願っている。ひきこもりへの正しい理解を持って本人やその家族に目を向け、当事者がSOSの声を上げられる社会をつくるのが、いま求められている。(第6部終わり)

# つながることが第一歩



ひきこもり外来を開設した医師の中垣内正和さんは「外部との接点を持ち続けることが重要」と言う

新潟県内

にかかったり、骨や筋肉が弱まったりしてしまうケースが多い。実年齢からは想像もできないほど衰え、早期老化ともいえる状態の当事者もいた。

ひきこもりのきつかけや生活の様子を聞いても「何も思い出せない」。社会参とうとする気持ちを持って加への意欲も減退していた。「外に出たいのにならぬ」という、非日常であるはずのひきこもりが家

職員が当事者宅を訪問する「アウトリーチ」や、ひきこもり地域支援センターなど相談窓口の整備といった行政の取り組みが不可欠だ。同時に、当事者側にも同じ境遇にある本人や保護者、また支援者と接点を持つほしい、と求める。ひきこもりの長期・高齢化はどこまで進んでいるのか。実態は見えず、明確

この連載へのご意見や感想をお寄せください。記事で紹介させていただくことがあります。郵便番号400-8515、甲府市北口2の6の10、山梨日日新聞社編集局「扉の向こうへ」取材班(ファクス055-231-3161、電子メールkikaku@san-nichi.co.jp)。